反帝戦線 NO11
社会主義学生同盟全国委員会機関紙 68 4/17

4・26国際反戦闘争・4・27労学共闘・4・28中央首相官邸闘争を、革命的反戦闘争として闘い抜き、日本帝国主義を包囲し、突撃せよ!

我々は、4・26・4・27・4・28闘争を一貫の連続闘争として闘い抜く。4・28闘争は、[illegible]等、[illegible]合して[illegible]スローガン、[illegible]争であり、[illegible]闘である。4・27闘争は、総評・反戦・全学連を[illegible]とする[illegible]・学生、反戦闘争として[illegible]。4・26闘争は、[illegible]の全国的全人民的[illegible]中央・首相官邸への[illegible]として組織するものである。

そして、この闘いを通じて、全学連・反戦派を、プロレタリア統一戦線として結合し、このヘゲモニーを[illegible]して、全人民的政治闘争としての国際反戦闘争を、革命的反戦闘争→プロレタリア政治闘争に[illegible]することである。

この、4・27―その一環の闘争は、日本帝国主義を包囲し、突撃するプロレタリア権力闘争の高揚である。

〈一〉

[illegible]における[illegible]運動の特徴その特徴としての総評―社会党の[illegible]動を[illegible]である。

それは、[illegible]私鉄スト→4・25～26私鉄スト→国鉄順法闘争(反合理化闘争)という交通共斗の闘いを軸とした春闘→4・27反戦闘争→倒閣闘争→7月参院選として設定されている。

国鉄5万人首切を中心とする、交通・運輸・通信部門に対する合理化は、後進国への資本輸出、農業、漁業の翻弄を通じて、日本―東南アジア太平洋地域の垂直統合→勢力圏編成このような日本資本主義の国内産業構造の重化学工業化の表現であり、日本帝国主義の排他的な攻撃として展開されている。従って、交通共斗→公労協の反合理化闘争→春闘闘争は、総評・社会党なボス交さの取引きはなる局面で、膨大な不満を大衆の中に形成せざるをえない。

4・27反戦闘争は、この大衆的不満を、ベトナム反戦、沖縄返還→倒閣→政権展望→参院選へと、議会主義的に収約する1日である。

この総評―社会党(民同左派)の基本的に[illegible]である。この路線は、日本帝国主義への敗北路線である。

そのベトナム反戦闘争は、北ベトナム―米国の和平交渉に焦点を絞りにベトナムの主張を支持する平和共存路線である。これは、南ベトナムにおける米軍の増強―ベトナム革命への反革命の強化をアンペイする点で犯罪的である。なお、日本帝国主義な、ベトナム―アジア後進国革命への独自的反革命の強化を意図し、沖縄返還=アジア侵略反革命の前線基地化を行なおうとしているのに対し沖縄返還を主張することにより、日本帝国主義に同調しつつある。

この、反反革命―反米を軸とする反戦闘争・反帝国主義闘争[illegible]望を獲得し、7月参院選[illegible]議会主義[illegible]ヘゲモニー拡大[illegible]する日本帝国主義[illegible]国主義[illegible]労働者階級を[illegible]て、[illegible]ない所の[illegible]は、ナショナリズム[illegible]労の前に、7月参院選に[illegible]増大とで[illegible]である。

だが、労働者階級は、春闘闘争の中から、全人民的政治闘争=国際反戦闘争に[illegible]政権展望[illegible]権力闘場の前提であり、この[illegible]主体には、権力闘争[illegible]自覚的意識性を[illegible]

〈二〉

ベトナムを頂点とする後進国永続革命と、それとの結合を媒介として北ベトナム、中国を中心とする労働者国家の世界革命の後退的国家への転化の方向性は、アジアに対する日米両帝国主義の侵略反革命に巨大な障壁となっている。このことは、ベトナム革命と結合した国際反戦闘争の高揚を日米両帝国主義内部に作り出し、帝国主義の後進国への侵略反革命の過程は、その内部に於ける革命と反革命の激突の過程として、同時に

侵攻する。
日本帝国主義のアジア侵略反革命の本格化なくの合図であり、昨年の訪ベト↓前木 今年カエニテ、香港をめぐって、既に展開されつつある。[illegible]日中間に持彼付けず 質=個別・[illegible]闘争・高揚↓国際反戦闘争=全人民的政治闘争への飛躍↓反政府闘争としての展開とは、この革命的高揚の質をとったものとして うけとめられなくてはならない。

〈三〉

従って 問われているのは この反政府闘争を 政府危機↓政治危機↓ブルジョア独裁の打倒とプロレタリア独裁の樹立へと導く プロレタリア権力闘争の「計画」としての戦術の一連の系列である。

そして、そこに於る中心的問題は 全人民的政治闘争は それ自体としては ブルジョア民主主義的であり、自然発生的であり、プロレタリアヘゲモニーの貫徹を抜きにしては、政府危機↓議会主義↓新たなブルジョア民主主義的政府の形成をもたらすのであり、決してプロレタリア政治闘争にはならないことである。

レーニンは、『何をなすべきか』に於て、個別経済闘争を ツァー打倒の全人民的政治闘争に統合することを主張し、『2つの戦術』に於て この全人民的政治闘争に 労農独裁(これ自体検討の要ありし)という権力問題=ヘゲモニーを提起することによって、それをプロレタリア政治闘争ープロレタリア権力闘争に転化した。これは、『4月テーゼ』『帝国主義論』に於て プロレタリア独裁に高められ、このプロレタリア独裁の戦術は、「帝国主義戦争を内乱へ」=プロレタリア国際主義、「赤軍」=戦術形態「ソヴィエト」=運動ー組織形態に具体化された。そして、この発展を作り出したのは、『何をなすべきか』に於て提起された 職革組織ー全国政治新聞を中心とする党の型である。

かつて、関西ブントは 60年安保闘争の総括として提起した『政治過程論』は 個別経済闘争と全人民的政治闘争との区別を明確にしなかったのみならず、全人民的政治闘争とプロレタリア政治闘争を明確に区別しなかった点、前者の後者への発展をもたらすプロレタリアヘゲモニーを抽象的にしか提起しなかったことに最大の欠陥がある。そのことにより、プロレタリアヘゲモニー=プロレタリア独裁の戦術を、戦術形態に矮小化し、小ブル急進主義的傾向をもたらした点である。もっと正確にいうなら、戦術の豊富化と具体化をつくりだす党の型を形成しなかったことであり、そのことは「党」とは過程の意識であるとする党形成論の現象性に規定されている。

〈四〉

日本帝国主義をおそう革命的高揚は、そのアジア侵略反革命の全面化の中で、ベトナムを頂点とする後進国革命と結合した国際反戦闘争ー全人民的政治闘争ー反政府闘争の高揚と、この下への個別経済闘争の統合として始まっている。そして 反革命は、東南アジア開発閣僚会議、太平洋地域閣僚会議ーいずれも米帝国主義は参加していないーに表現される独自的勢力圏を建設して対米自主体ー対決というナショナリズムとして登場する。

従って、プロレタリア独裁を導く政治的質=プロレタリア国際主義は「日本帝国主義のアジア侵略反革命粉砕↓日本帝国主義打倒」として形成されなくてはならない。そして、このプロレタリア国際主義の内実はベトナム革命、米国反戦闘争との結合を通してのみ形成可能であり、かつ、米国反戦闘争との「自国帝国主義打倒」を質とするこの結合は、ベトナム革命との結合よりも 高度の意識性を必要とする。何故なら、ベトナム革命との結合は 侵略反革命という資本と民族国家の運動に媒介されて形成されうるが、米国反戦闘争との結合は この資本と民族国家の運動な米資本と米帝国主義との対立として進行するが故に 意識的には極めて困難であり、国際反戦闘争の中での 徹底した意識性の貫徹として形成されなくてはならない。

このプロレタリア国際主義は、現実の大衆闘争に於ては 政策阻止闘争を権力闘争へ発展させる戦術形態をとらなくてはならない。

後進国への侵略反革命の中で米帝国主義との世界分割戦を貫徹する日本帝国主義のナショナリズムは 帝国主義軍隊を中軸とする帝国主義的国家体制として物質化する。それは 太平洋地域閣僚会議=ASPACの軍事化要求に表現される 自己の勢力圏内の後進ブルジョアジーの米帝国主義の没落への危機感↓日本帝国主義への反革命軍事力要求に応えるものである。これにより、経済勢力・国民経済ナショナリズムから、その

政治的軍事的掌握＝政治的軍事的ナショナリズムの発展へ、大衆を、自主的役＝前衛政党を頂点に吸引するのである。その中で、自位隊の帝国主義軍隊化を帝国主義国家体制の中心にとって各個と、沖縄基地を、アジア侵略反革命の前線基地として掌握される。

従って、「日本帝国主義のアジア侵略反革命粉砕↓日本帝国主義打倒」のプロレタリア国際主義は、侵略反革命と軍事力強化の個々の政策と対決する当いを、帝国主義国家権力の中心にある帝国主義軍隊の解体へ収約し、この中から、敵国家権力を粉砕し、プロレタリア独裁をうちたてる赤軍の建設を、全人民の武装と通じて実現する（職場＝基地闘争）政治ストライキの政治的闘争である。

革命とは、政治権力の奪取なしに設定され、その運動＝組織形態は、市街戦として展望されなくてはならない。だが、プロレタリア革命とは、プロレタリア独裁↓社会主義社会↓共産主義社会への永続的過程であり、政治革命の中に社会革命的な内容が含まれ種々の形態、市街戦の下に生産点（工場）での当いな統合される運動＝組織形態も必要なのである。街頭デモ↓赤軍↓ゼネスト↓生産管理の発展を経過して、ロシア革命のソヴィエトは、この意味でプロレタリア革命の権力形態なのである。

我々は、全学連－地区反戦を、ソヴィエトを最高の形態とするプロレタリア統一戦線として位置付ける。従って、地区反戦は、諸階級階層を統合した地区ソヴィエトへ高められ、全国的に統一された（全国政治ストライキ）戦略目標として、プロレタリア独裁権力へ高められるという永久性ことって、これを一切の戦術の決定の（以下略）

以上の観点なら、プロレタリア独裁権力へ高められるという永久性ことって、これを一切の戦術の決定の（以下略）

（五）

全国学生ストライキ－全国学生スト－ゼネラルストライキ－プロレタリア国際主義の確立

反戦学生同盟は、反戦高校生同盟と共に、一日本帝国主義のアジア侵略反革命粉砕↓日本帝国主義打倒へ高めるためのものであり、この政治闘争として、大衆を獲得し、全人民的闘争として、この国際反戦学生同盟（略）と全人民の武装↓赤軍の創設をとうした革命的反戦学生へ発展させるべく（以下略）

（六）

ロレタリア国際主義と「日本帝国
主義の沖縄返還＝アジア侵略反革命
の前線基地化粉砕→自衛隊の帝国主
義軍隊化粉砕」の革命的反戦闘争と
いう4.28闘争で獲得された質をとう
して、大衆的反戦闘争として展開し、
労働者ー学生の大衆として、再度の
防衛庁へのデモをかちとられなくて
はならない。

次いで、このプロレタリア国際主
義と革命的反戦闘争の運動としての
持ち込みは、学生運動の先駆性の表
現であり、これによって、地区反戦
ープロレタリア統一戦線の現代発展の
条件をつくり出さなくてはならない。

さらに、全学連ー地区反戦を主軸
として4.28首相官邸中央闘争の展望
を提起し、総評ー社会党の制動→改
良主義→7月参院選という議会主義
運動を大衆的に粉砕して、プロレタリ
ア統一、プロレタリア権力闘争の展
望を切り開かなくてはならない。

4.28沖縄闘争中央首相官邸闘争
は、4.26ー27闘争の戦闘の中で
国際反戦闘争＝全人民的政治闘争の
展開過程で、革命的反戦闘争＝プロ
レタリア政治闘争への大衆的展開ー
[illegible]全学連ー地区反戦を
プロレタリア統一戦線として公然と
登場させなくてはならない。それは
[illegible]ストライキ
[illegible]に、首相官邸＝帝
国主義暴力出撃への闘争と[illegible]
地点であり、この闘争は、全学連ー
地区反戦というプロレタリア統一戦
線の[illegible]発展の方向性＝未
来に[illegible]として表現するものである。
[illegible]4.26ー27ー
[illegible]プロレタリア国際主義ー

赤軍ーソヴィエトという、未来にお
るプロレタリア独裁の戦術の実現へ
の永続性をとおして存在し
このことにより、総評ー社会党ー共
産党の制動→政権獲得→7月参院選
という議会主義＝改良主義を突破す
る展望をかちとらなくてはならない。

このプロレタリア国際主義ー革命
的反戦闘争ープロレタリア権力闘争
は、4.26ー27ー28闘争以降、5月成
田空港建設阻止の全国闘争（空軍戦
）→6月成田ー首都への結集（決戦
戦）として、次の展望を設定し、切
り開かなくてはならない。

（六）

最後に、総評ー社会党ー共産党の
左翼的補完物たる、日共系、革マル派
・トロ派、ML派について批判して
おこう。

これらの諸党派は、日米帝国主義に
おいて、日本帝国主義の、独自の勢力
圏形成へ向け、反革命軍事力を強化
し、それを対米自主性として打ち出
しつつあり、この帝国主義（帝国主
義軍隊化）と沖縄返還（アジア侵略
反革命の前線基地化）と対決しえない
ことである。

それは、第一に、反反革命ー反米
という国際反戦闘争＝全人民的政治
闘争の自然発生性への屈服、プロレ
タリア国際主義の喪失である。第二
に、このことにより、国際反戦闘争
の発展の方向を設定しきず、戦術形
態の後退化や、革命的反戦闘争ープ
ロレタリア統一戦線の主体（赤軍ー
ソヴィエト）の形成へ結実しえない
小ブル急進主義である。第三に、こ
の小ブル急進主義は、全学連ー地区
反戦を、プロレタリア統一戦線[illegible]

めることができず、総評ー社会党ー
共産党の反米民族主義ー議会主義的
統一戦線の枠内にとどまるので
ある。

、米大使館デモ、王子野戦病院デモ
を、4.26ー27ー28闘争の基本的闘争
戦術とし、4.28沖縄闘争の闘争方針
は、この観点から批判されなくては
ならない。

〈ア〉